

## 「自己本位」の日本文学研究のすすめ

尹相仁

◎尹 日本文学を勉強している尹相仁と申します。

私が日文研に参ったのが1994年です。初めて来ました。そのとき日文研で催された大きな会議があって、その会議に呼ばれて、まだ若い、助教授のころでしたけれども、日文研のすばらしい施設を見て驚いた覚えがあります。そのときは、大江健三郎さんのノーベル賞の受賞の知らせがあって間もなくのころで、ここで講演をしました。それ以降いろんな機会に日文研にはお世話になっておりました。もう既に30年になりましたが。

きょう私がちょっと触れる予定の作家の夏目漱石は、2017年が生誕150周年で、その前の年が死後100周年でしたね。いやあ、これはうらやましい話です。つまり、多くのひとが生誕を記念してくれて、死亡も記念してくれる。ただ、組織や機関は生誕については記念してくれるのだけれども、その組織の消滅や解散を記念することはないので、日文研もあと30年あるかどうかという悲観的な声も聞こえますが、どうか長く生き延びて、末永く日本文化研究者のために頑張っていたきたいと思います。

最初に私が触れなければいけないのは、きのうアリソン時田先生のご発表のときに私が質問した内容についてです。そのときはちょっと時間切れで、私の質問が途切れてしまった感じがありました。私が提起した問題は、学会のような知識社会に通用することと、その知識社会に影響を与えること、その2つのことの意味づけをどうするかということです。では、これにちなんで、私の個人的な経験を少し述べたいと思います。

もう20数年前に韓国の慶州という古い都市で、ある学会がありました。それは韓国の学会と日本の学会が共同で会議を開いたのですが、そのとき私は発表者として何かをしゃべりました。日本人の方が多かったので、会議の言語は日本語でした。

私の発表が終わってからある韓国人研究者が手を挙げて、私の発表についてコメントをしました。内容はこうです。「あなたの発表は日本の学会でも十分通用する」。まあ、私を褒めるつもりでの発言だったのでしょうけれども、私はそれを聞いていて侮辱されたような気持でした。私はこの「通用」という言葉が持っている暴力に近い知的墮落に敏感に反応せざるを得ませんでした。「通用する」というのはメインストリームに認められるということでしょうけれども、突き詰めていくと、取り込まれるということでもあります。

私は自立した研究者であって、ただ単に誰かに認められたいがために研究するわけではないのです。できれば、通用されるよりは尊敬される研究をしたい。夏目漱石も日本の文学界に通用することを目標に作品を書いてはいなかったはずで、やはりそういった異なる土俵を別に作るという強い志というのが必要ではないかなという考えを持っておりまして、きょうの話もそういった私の考えに基づいて展開しようと思っています。

私は夏目漱石の研究を留学の時代には熱心にしましたが、帰国してからはしばらく他のテーマに興味が移っていました。2000年代になってから、再び夏目漱石を読み始めたころ吉本隆明さんが漱石の本を出したので、それをすぐ買って読んだのですが、不得要領で杜撰な内容と思わざるを得ませんでした。目新しい資料や見解も見当たりませんでした。吉本隆明という著名な評論家が晩年になって、漱石をめぐる言説体系のなかで「通用」しうることを書き並べていることに失望しました。

実を申せば、私は本当は「漱石の巨きな旅」というタイトルに魅かれてこの本を買ったわけですが、とくに「巨きな」という表現に惹かれていたと思います。しかし、読んでみて、吉本さんの語る「巨きな旅」が漱石という「巨人」の形成にどのような働きをしたかについては、ついにわかりませんでした。

吉本さんはこの本の中で「漱石神話」という言葉を使っていますが、つまるところ吉本隆明さんの本は「漱石神話」の増殖、拡大再生産に携わるという側面においてのみ、十分に「通用」しうるだろうという淋しい思いをいたしました。

それ以後、ある種の反発から夏目漱石のヨーロッパおよび満韓の旅を私なりに調べてみたいという思いが沸いてきました。夏目漱石はイギリス留学の間、小さい手帳にまめに日記をつけていました。その日記を読んでもと、夏目漱石という人がどのような経緯で脱西洋のための思想闘争を展開し、やがて小説家になったのかということが見えてくるような気がしました。

詳しく述べますと、夏目漱石という人、あのときは金之助でしたけれども、夏目金之助という人間の自己意識が崩壊して解体される過程が、このイギリス留学中の日記で見取れます。だから、吉本さんは「巨きな旅」と言ったのですが、そのような表現が成立するためには洋上の漱石の「小さな自己」をめぐる認識作用について触れることが前提となりますが、あの本にはそれについての言及は見当たりません。それから、満韓旅行記で見取れる夏目漱石は、それまで一貫して批判の眼を向けていた明治維新以降の日本の近代文明に対して、一転して肯定の見方を示しており、「巨きな旅」とは程遠い、安易な妥協をしているというふうに見受けられます。時間がないので、簡単に幾つかの事例を紹介します。夏目漱石の船には日本人は留学生が4人だけ乗ってまして、周りは全員西洋人です。夏目漱石の日記によりますと、漱石を苦しめたのは船酔いよりも多数の西洋人の存在だったのです。西洋人に囲まれて、自分が見すばらしくみえる経験をしていました。

旅が続く中、夏目漱石は東京にいる妻、鏡子にも手紙を送っているのですが、ある手紙ではこういうことを言っています。「其許（そこもと）は歯を抜きて入れ歯をなさるべく候。ただ今のままにては余り見苦しく候」、こんなことを言っているのですね。また、ほかの手紙では、髪は銀杏返しにしないで、洗い髪にしておきなさい。あとまた、船の上ですけれども、入れ歯のことをちゃんと守りなさい、つまり歯を全部抜いて入れ歯をしなさいと。

何でこんなことを言っているんでしょうか。こういった発言が出る背景は、日記をこ

まめに読んでいけばわかってくるような気がします。夏目漱石は船の上で一緒に乗っている西洋人の女性をよく見かけられるのですけれども、その女性たちが、ミセス・ノットを初めとして非常に美しい微笑みをいつも見せているのですね。その微笑みとともに歯列のきれいな歯も見えるわけですが、それは夏目漱石が今まで普通に思っていた、慣れていた歯並びの日本人女性の容貌とは全然違う様子でした。

そういった歯並びがきれいな様子を夏目漱石は船の上で目撃して、自分の妻の歯並びがあまり美しくないと感じるようになるのですね。それで、入れ歯ならきれいに整列されているはずですから、「入れ歯にしてください」と言っているわけです。

また髪の毛の場合も、西洋人たちが船の上で金髪をなびかせながら歩く姿が美しく見えたので、「洗い髪にしてください」と言っているのです。

パリに到着してから送った手紙では、「こちらに来てみれば男女とも色白で、服装も立派で、日本人の私は黄色く見え候」、このような発言をします。

しかしながら私は今、ここにいらっしゃる井上先生も、また石川さんを見ても、どう見ても黄色く見えません。黄色く見えるはずがないです。黄色く見えると言ったのは、これは当時漱石も西洋人がつくり上げた人種観の観念の虜になっていることを意味するわけです。ですから、この過程をずっと追っていくと、夏目漱石は旅の間徹底的に西洋的な価値に取り込まれて、自分を小さく小さく、低くしていく、その過程が見えてきます。

その後、イギリスに行って憂鬱な留学生活を送るのですが、そのときはその解体された自己が少しずつ回復される過程と見ていいと思います。一遍地獄まで落ちた夏目漱石が、西洋と戦う一人の戦士として生まれ変わって日本に戻ってくるプロセスが、その日記から見て取れるのですけれども、いま述べたことについては日本の研究者からあまり聞いたことがありません。漱石のような偉大な作家となりますと、日本の学界の風土では偉大とみなされる人は、その人の能力だけでなく人格的にもそれらしくなければいけないという思い込みがあるせいなのか、夏目漱石のこういった姿はあまり伝わってきません。

つまり、夏目漱石神話をできるだけ無菌状態でつくり上げるためには、都合の悪いことは封印され隠蔽されるか、あるいは作家の本体と分断して例外化することが必要だったかもしれません。

それから夏目漱石の自己本位についてですが、夏目漱石は英文学研究をイギリス人たちがやっている仕方であることを拒みました。つまり、自己本位の実践の第一歩は、「しない」「なさらない」ことだったと言っているかもしれません。まあ、ひらたくいえば、まねしない、よけいに代弁しないということでしょう。夏目漱石は、英文学にたいしてみずから英文学そのものを信奉して、その本質にできるだけ近づこうとすることを止めて、英文学というのは日本人である自分が招いた客人のようなものだという認識に至ったように私は思います。

つまり、これは大事な考え方で、つまり外国文学というのはそれぞれの国の研究者にとってはお客であるということ。しかし実際にはその反対の現実が続いているわけです。

ね。夏目漱石も東大で英文学を勉強していた際は、英文学の金箔入りの本で埋め尽くされた書齋に呼ばれていくぶん委縮された客のような思いだったのではないでしょう。それを克服するための思想闘争がつまり自己本位の主張だと言えます。

では、自己本位という観点から、今後の日本文学研究をどうやっていくかということをちょっとのべさせていただきます。

韓国では日本文学という言葉は、中立的な意味を持ちえないのです。この日本文学というのは植民地時代には、朝鮮文学より高い権威を与えられたものでした。それは当時使われた言葉にもあらわれています。京城帝大では日本文学が「国文学」でした。朝鮮文学の場合は地方性を帯びる名の「朝鮮文学」で通しました。

そういった植民地時代の経験から日本文学という言葉は、いい意味でも悪い意味でも特殊性を帯びて使われていました。いい意味というのは、韓国で日本文学は概して人気があるという特徴を持っているということを指します。韓国では1960年代から日本文学の翻訳がされ始めたのですが、現在にいたるまで主な外国文学の一つでありつづけています。

そういった一方では、日本文学のもつ魅力、もう一方では日本文学に対するイデオロギー的な拒否感が入り混じっている、そういった意味が日本文学という言葉に付着しているのです。そこで私たち日本文学研究者としては、日本文学じゃなくて日本の文学をやるという思いで取り組まなければいけないと思っています。

ここでいう日本の文学という言葉はいままでの習わしからの断絶、あるいは転換を目指す方向性を指しているといえます。それはまず、フランスの文学、トルコの文学というふうに普通の外国文学として再定義する意志をあらわしています。再定義の方向はまずは「等身大」の日本の文学をお客として礼儀をもってお招きすることでしょう。そうするためには、日本の文学にたいする不毛な偏見を警戒していくことが大事でしょう。またその一方で日本において行われ、築かれた言説のなかで形成された漱石像というのは、決して等身大のものとはいえず、細心の注意が必要といえます。こういった日本文学に対する姿勢の変化が今行われている、そういった時代に差ししかかっていると思います。

もうひとつ付け加えますと、いま私のいう「日本の文学」ということばにある助詞の「の」は所有を意味してはならないと申したいと思います。普通、多くの日本人の文学研究者たちは、日本文学は当然日本に属している、自然的に所有権が与えられたものであると認識しているようです。

その所有権について少し補足します。いま村上春樹の場合は、村上は日本の作家であるとか日本文学であるとはっきり言えないような状況といえます。つまり、世界で流通しているハルキ・ムラカミは日本語の作品が英語翻訳になる過程で編集者や訳者によって西洋の美的規範や文化的慣習との調整を経たものなので、日本語のテキストのみではハルキ・ムラカミは成り立たなくなっています。また、研究のほうでも村上春樹についての評論や論文の数は、英語で書かれたものが日本語で書かれたものよりはるかに多い。

とくにアメリカの大学から出た村上春樹の博士論文は、日本の何倍もあります。韓国でも村上春樹の博士論文が多く出ています。

それから、多和田葉子という作家。この作家は日本ではほとんど研究されてないですけども、ドイツやアメリカではたくさんの論文が出ています。本も研究書が何冊も出ています。ですから、多和田葉子を調べるためには英語やドイツ語を読まなければいけないというのが現実です。日本語で書かれているものもあるのですが、論点が異なっているので、海外の研究を積極的に取り入れることは避けられないといえます。

それから、例えば深沢七郎という作家がいます。その人の問題になった「風流夢譚」という作品が最近インターネットで読めるようになりましたが、授業で使おうと思い、関連する論文を探しましたが、日本語の論文は見当たりませんで、結局ただ一つみつけたのがエール大学のジョン・トリート教授が英語で書いたものでした。

このような政治的な環境、あるいは国際化という環境の変化により、日本の所有する文学ではなくて共有資産としての日本の文学とどうやって向き合うかということを真剣に考えなければならない時代になったと思っております。

私はこの会議の冒頭に井上章一先生が提起した問題意識を全面的に共有したいと思います。日本文学もゆくゆくは、例えばインド文学研究はインド人もやるしアメリカ人もやるしドイツ人もやる。あるいは韓国人もやる。そういった幾つかの地域や国が研究のハブとなって、そのハブがあるいは国籍を異にする人たちが論争したりするような状態になればいいなと思っています。

では、これで終わります。ありがとうございました。